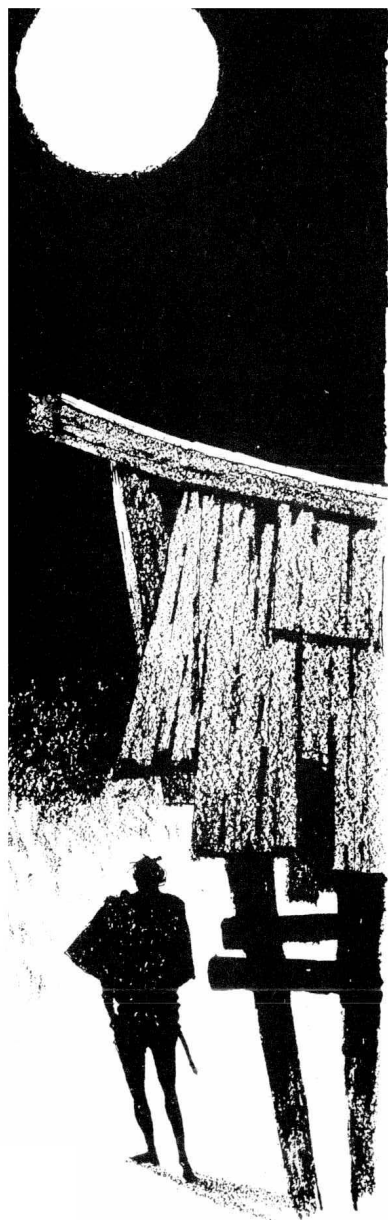


木枯し紋次郎シリーズ

怨念坂を螢が越えた 笹沢左保



怨念坂を螢が越えた

昭和四十八年二月二十日第一刷

著者〳〵笹沢左保

発行者〳〵野間省一

発行所〳〵株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一 郵便番号一―二
電話東京(〇三) 九四五―一一一大代表 振替東京三九三〇

印刷所〳〵豊国印刷株式会社

製本所〳〵黒柳製本株式会社

定価〳〵五〇〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします
©笹沢左保 一九七三年

目次

駈入寺に道は果てた 五

明鴉に死地を射た 五一

錦絵は十五夜に泣いた 九九

怨念坂を螢が越えた 一四七

上州新田郡三日月村 一九七

画
岩田専太郎
装幀
山内
暲

駈入寺に道は果てた

1

晩秋の日暮れは、驚くほど早かった。ピンク色の空に妙義山の複雑な稜線が紫色のシルエツトになって浮かび上がっているのを、たったいま眺めやったような気がする。それがいまは、薄墨色の空と黒々とした山に、変わってしまっていた。

色があった視界に、突如として黒い煙を流されたような感じだった。夕闇の訪れとともに、地上のすべてが豹変する。田畑は黒い空間となり、街道を往来していた旅人の姿がピタリと途絶える。風が急に冷たくなって、キナ臭いような初冬の匂いを運んで来る。

昼間の晩秋が、夜の初冬にと変わるのであった。宿場だけに、人々の生活が見られる。宿場と宿場の間の街道は、余計なものみたいに放置される。昼間は人家があるとは気づかないところに、ポツリポツリと赤茶けた灯がとるのであった。

その渡世人は余計なものとなった街道を、更に余計なもののようにひっそりと歩いていた。早くも黒い稜線だけになった妙義山を前に見て、渡世人は大股に足を運んでいる。上州は安中あんなかの宿を、すぎて間もない中山道であった。

あと二里ほどで、松井田である。松井田につくのは、五ツ前になるだろう。午後八時になるか、ならないかであった。旅籠屋に泊るには、時刻が遅すぎる。渡世人が特に足を早めないのは、旅籠屋などに縁がないからなのだろう。

ひどく薄汚れた道中支度だった。生涯そんな道中支度で通すばかりはない無宿人であることは、誰の目にも明らかであった。丸合羽を、引き回している。そのまま雑巾にもなりそうな、ゴワゴワの道中合羽である。塵埃を吸い取って、厚味ができていた。

目深にかぶった三度笠も、すっかり古ぼけている。風雨に晒されて灰色になり、あちこちに亀裂や隙間が見られた。縞模様も定かではなくなった道中合羽と破れた三度笠が、渡世人のアテのない長旅を象徴しているようであった。

泥水にでも浸けたような手甲脚絆、同じ黒足袋に草鞋ばきである。錆朱色の鞆を鉄環と鉄鎧で固めた長脇差が、見るからに重そうだった。その長脇差を急角度に、左腰に落している。三十すぎの長身で、骨っぽく痩せた渡世人であった。

三度笠の下で、伸びた月代が風に震えている。その顔に、表情はなかった。両頬がゲッソリと削いだように落ちていて、目鼻立ちの整った細面を一層鋭角的にしていた。虚無的な眼差しだが、目が突き刺すように鋭い。何となく、憂鬱そうであった。

暗く、沈みきっているのである。世間のすべてに背をむけているような拒絶感に、男っぽい冷やかさが感じられる。感情が、死んでいるみたいだった。何を考えているのか、傍目には見当もつかない。それが一種の、凄味になっていた。

病的に青白い顔の、左頬に傷跡が見られた。古い刀傷の跡だった。傷の両端が引き攣れているが、醜さを感じさせるほどには目立たなかった。それよりも気になるのは、渡世人がくわえている楊枝であつた。竹を削つて作つた手製の楊枝であり、両端が鋭く尖がらしてある。

長さが五寸、約十五センチの楊枝だった。齒ブラシ代わりに使われたもので、当時の楊枝としては特に珍しい長さではない。むしろ、そうした楊枝を常時くわえていることのほうが、変わっているのであつた。その渡世人にとっては、すっかり習慣化していることらしい。

楊枝をくわえていることを、まるで意識していないのである。前歯で軽く噛んでいるのか、楊枝の先端が絶えず動いていた。小さく円を描くような、動き方であつた。それが渡世人の無意味な生き方を、みずから物語っているみたいに感じられた。

天保九年十一月下旬、髪飾りや装身具など無益な贅沢品が禁じられたり、儉約令が下つたりで何となく味気なかつたこの年も、あと残りわずかになつていた。上州の晩秋は人工美の代わりに、寒菊や山茶花によつて彩られていた。

夕闇の中に、真赤な烏瓜の実が一つだけ、ポツンと浮き出していた。渡世人は感情のこもらない目を、チラッとその烏瓜の実に走らせた。烏瓜の実を頭上に、立ち小便をしていた百姓が振り返つた。六十をすぎている老農夫であつた。

野良着の上に綿入れの甚兵衛羽織をつけ、鍬を肩に担いでいた。手拭いで、頬かぶりをしている。やや、腰が曲がつていた。渡世人を見て、年老いた百姓はニヤリと笑つた。その老農夫が、特に人懐こいわけではない。誰彼の区別なく親しみを示す、人のいい老人の特性なのであ

った。

「今夜は、冷えるで……」

百姓はそう言つて、渡世人と並んで歩き出した。渡世人は目を伏せただけで、返事をしなかった。

「野宿には、向かねえ晩だがね」

百姓は、齒のない口の中を見せて笑つた。渡世人が野宿するつもりであることを、老農夫は見抜いたらしい。

「どうせ宿はとらねえんだろうから、賭場へ行くがええ。松井田の手前で妙義寄りに折れると、八城つてところがあるだ。そこで今夜は、中小坂の源兵衛親分の盆が開かれるっちゅうからな」

百姓でも老人は、賭場に興味を持っているようだった。若い時分には、博奕ばくちに夢中になったことがあるのに違いない。だが、渡世人のほうに、まるで話に乗って来ない。渡世人のくせに、賭場に対して関心がないようである。

「夜つぽて勝負が続けられるつてこつたから、そこで遊んでいりゃあ野宿するよりマシだがね」

百姓は、渡世人の顔を見上げるようにした。渡世人は相変わらず、黙り込んでいる。

「ははあ、何とも口の重い旅人たびんさんだあ」

そう言つて、老農夫は声に出して笑つた。中山道を高崎から西へ三里で、板倉伊予守三万石

の城下町安中である。城下町と言っても人家はわずか六十四戸、人口も三百五十人ほどだった。六十四戸のうち、十七軒が旅籠屋であった。

この安中から二里十六丁で、松井田である。松井田は人口千人、人家二百五十戸、旅籠屋十軒の宿場であった。このあたりの特産物としては、細繩とか竹細工ぐらいのものしかなかった。宿場としても、規模が小さい。結局、農業が生活の基盤となっていたのであった。

その安中と松井田の間には、ずっと杉並木が続いている。見事な杉並木で、その梢が天を刺すように高かった。昼間でも鬱蒼とした感じなので、日暮れとともに杉並木が闇を厚くする。右側は山になっていて、それもまた樹海に被われていた。

「もし……」

そう声がかかったが一瞬、その主がどこにいるのか見当をつけかねた。百姓は足をとめたが、渡世人はそのまま通りすぎた。

「もし、旅人さん……！」

右側の杉の木の蔭から飛び出して来た男が、渡世人の行く手を塞ぐように立ちはだかった。小ざっぱりした身装りの男で、二十六、七に見えた。百姓ではない。宿場の商家の者に、違いなかった。役者にしたいような、美男子であった。

「どうか、お助け下さい」

男は渡世人に向かって、哀願するように頭を下げた。男は、脅えきった目をしていて。夜目にも、青白い顔をしている。

「わたしは安中宿の旅籠、住吉屋のあるじで紋次郎と申します。所用で松井田まで参り、その帰り道なのでございますが……」

男は絶えず、周囲を気にしながらそう言った。

「お前さまが、安中宿の住吉屋の若旦那じゃえ……？」

渡世人と並んで立った老農夫が、もの珍しそうに男を見やった。渡世人はぼんやりと、前方の闇に視線を投げかけていた。表情がまったく、動かなかった。

「はい」

紋次郎という旅籠屋の若主人は、上の空で答えた。落着きを、失っていた。

「助けてくれて、いってえ何があっただね」

老農夫が、首を伸ばして訊いた。

「命を、狙われているのでございます」

旅籠屋の若主人は、渡世人と百姓の顔を交互に見やった。

「誰がお前さまの命を、狙っているっちゅうんだ」

老農夫が、あたりを見回した。人影は、見当たらなかった。闇が風に、揺れているだけだった。

「それは、わかりません」

「わからねえ……？」

「はい。たださっきから、人が追って来る気配がしますので……」

「お前さまは、その人影っちゅうのを目で確かめたのかね」

「いいえ、それを見定めることはできません。ひとりか二人の足音が聞えて、わたしが立ちどまるとその足音も止まります。わたしが歩き出すと、またその足音が追って来るのでございます」

「そんな気がするだけなんじゃあ、ねえのかね」

「気のせいなんかでは、ございません」

「お前さまには、人から命を狙われるっちゅう心当たりでもあるのけえ」

「とんでもございません。ありきたりな旅籠屋のあるじで、他人さまから恨みを買うようなことになる道理がありません」

「そんなら、何も心配することはなかんべえ。このあたりに追剝が出るなんて話も、聞いたことがねえしな」

「ですが、何とも恐ろしいやら、気味が悪いやらで……。誰かが追って来ることだけは、間違いございません」

紋次郎という旅籠屋の若主人は、黙り込んでいる渡世人に縋るような目を移した。

「そこで、お願いでございます。安中宿までわたしと一緒に、引き返して頂けないでしょうか。旅人さんが一緒なら、大抵の者は手出しを致しません。どうか、そのようにお願い致します」

旅籠屋の若主人は、繰り返し頭を下げた。渡世人は依然として、沈黙を続けている。何の反

応も、示さないのである。

「もちろん、それなりのお礼はさせて頂きます。今夜は安中宿の、住吉屋にお泊り願って……」

紋次郎という住吉屋の若主人は、渡世人の道中合羽を掴みたい風情であつた。

「折角ではござんすが、お断わり致しやす」

渡世人が、ようやく口をきいた。低く、かすれたような声だった。

「え……！」

住吉屋の若主人が、情けなさそうな顔で小さく声を洩らした。

「他人さまのことには、関わりを持ちたがらねえ性分なんで……」

それだけ言うと、紋次郎という男をよけるようにして渡世人は歩き出してゐた。振り返ることもなく、渡世人は遠去かつて行つた。老農夫が、そのあとを追つた。しかし、渡世人に追いつく前に、百姓は左へそれる脇道へはいつて行つた。その方向に、老農夫の住まいがあるのだろう。

間もなく、松井田であつた。松井田へはいる手前に、中山道からはずれて南へ下る道がある。下仁田街道の中小坂へ、通ずる道であつた。途中、妙義山への登り口もある。その中山道と下仁田街道への道の分岐点に、三人ばかり男が立っていた。

いずれも、遊び人ふうの男たちだった。着流しに揃いの半纏一枚で、三人とも寒そうに首を縮めていた。三人のうち二人が、提燈ちようどんを手にしている。提燈には、亀甲で『源』の字を囲んだ印が浮き上がっていた。妙義山の東側を中心に中山道の松井田、下仁田街道の中小坂の一帯を

縄張り内に行っている貸元、中小坂の源兵衛のところの若い者だとその提燈を見ればすぐにわかる。

三人の若い者は、近づいて来る渡世人に気づいてホッとしたような顔になった。若い者たちは、賭場へ客を誘うのが役目なのである。いわば、客引きであつた。しかし、誰でもいいから誘う、というわけにはいかない。その選定に、迷うわけだつた。

迷つてばかりいて、ひとりも誘わないのでは何もならない。その点、相手が渡世人であれば、気楽に声をかけられる。迷う必要もない。それで、三人の若い者は救われたような、顔つきになつたのである。

「旅のお人……」

提燈を持っていない男が、渡世人にそう声をかけた。渡世人は、足を止めた。

「お引き留めして、失礼さんにごぞんす。ちよいとこの先で、中小坂の源兵衛の賭場が開かれておりやす。年に一度、源兵衛が生まれやした日に夜っぴて勝負が行われやす定例の盆にごぞんす。もしお暇があたりでしたら、是非とも寄つてやつておくんなさい」

男が一気に、口上をのべた。渡世人の返答を待つて、ほかの二人が提燈を高く掲げた。渡世人の表情のない顔が、赤く照らし出された。くわえている楊枝が、相変わらず小さな円を描くように動いていた。

「おめえさんは……!」

「木枯し紋次郎さんで……!」

提燈を持った二人の男が、驚いたように同時に口走った。

「へい。上州は新田郡ごおり三日月村の生まれで、無宿の紋次郎にござんす」

渡世人は、心持ち頭を低くした。

「木枯し紋次郎さんが顔を出してくれたとありゃあ、中小坂の源兵衛も大層喜ぶことござんしょう。一つ、よろしくお願い致しやす」

提燈を持たない男が、勢い込んでそう言った。

「さあ、どうぞ。ご案内致しやす」

提燈を持った一方の男が、南へ下る道へと歩きかけた。

「寄らせて頂きやす」

渡世人は会釈をしてから、その男のあとに従った。下仁田街道へ通ずる道へはいると、すぐに橋を渡った。右手に、妙義山があるはずだった。月のない晩で、一名白雲山とも呼ばれている妙義山は、闇に没して見ることができなかった。その妙義山まで、一里の距離であった。

2

賭場は八城村の輪幸寺という寺の、本堂を借りて開かれていた。一年に一度、中小坂の源兵衛の誕生日に開かれる定例の賭場であった。土地の老農夫までが知っていたのは、一種の年中行事みたいになっている盆だからである。

翌日には寺銭の一部で大量の餅を搗き、源兵衛の縄張り内にある村々の子どもたちを残らず